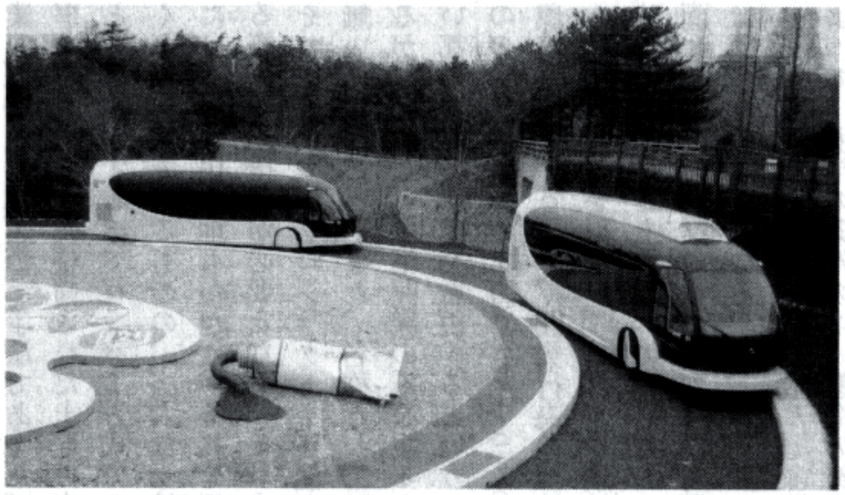
に名を借りた開発行為ではないかとの非難がなされたことにより、事態は決定的局面を迎えることになる。

時あたかも、一九九九年春、事態は急転する。その年の春、海上地域における会場想定地の一角で、絶滅危惧種のオオタカの営巣地が確認されたのである。オオタカは食物連鎖の頂点にあり、それゆえ、オオタカの棲息が見られることは豊かな自然が息づいていることの証左でもある。オオタカは本来、人里近郊に棲息するので、海上のような里山で営巣が確認されることは自然なことではあるが、レッドデータブックに載る絶滅危惧種であり、その営巣が確認された以上、そこに開発造成の手を入れることはできない。



注目される大型無人隊列走行バス「IMTS」

オオタカの出現を待っていたかのように、即座に隣接の愛知青少年公園が、会場候補地として脚光を浴び始めた。ここは当初来、その可能性が取りざたされており、関係者の一部にも、敢えて難しい海上地域で開催するより、こちらで開催したらどうかという案も内々検討されていたようだが、オオタカの出現が一気にその後押しをした。

愛知青少年公園は、大阪万博が開催された昭和四十五年、この地に開設され、自然環境に恵まれた公園として、家族連れで休日にはにぎわう場所であったが、この場所を開催期間限定で一時活用すれば、基本的に新たな用地取得や土地造成は不要となる。温水プールやスケートリンク、各種スポーツ施設等が盛んに活用されていたが、博覧会のメイン会場をここに変更することは、短期間のうちに決定された。ある面、オオタカの出現が渡りに船だった感が無きにしもあらずである。

しかしながら、国際機関に登録した会場候補地は、

当初の「海上地区」であり、海上地区をはずすことはできない。幸いにして、登録上、候補地は海上地区のみとは限定されていなかった。従って、海上地域での開催部分を極めて限定的に残しながら(現・瀬戸会場)、メイン会場を青少年公園に移すことで、開催に向けて大きく舵は切られた。そして、瀬戸会場は、博覧会の原点として、里山保全を学び、自然体感をするゾーンとして位置づけられた。長久手会場も新たな土地の改変造成はほとんどなく、大きな木もすべて移植するなど徹底した環境配慮がなされ、こうして史上初めて森の中の博覧会が実現した。

このような経緯で、博覧会構想は、メイン会場の変更以来、極めて短い期間での整備を余儀なくされた。わが国初の常電導式リニアモーターカー・名古屋東部丘陵線「リニモ」も、当初、博覧会に間に合わないかと心配されたものの、地元名古屋市や長久手町、地権者の理解の下、急速に整備が進められ、アクセス整備の一つではあるものの、博覧会理念に沿った新技術の実証展示としても大人気を集めている。中部国際空港「セントレア」も開港し、東海環状自動車道・名古屋瀬戸道路をはじめとするインフラ整備も一気に進められた。博覧会は国家事業。まさにその成功を期して、国・地方・経済界あげての推進が図られたが、この機会に、あらゆる場面において、博覧会の開催と成功に向けて尽力されたすべての人にあらためて感謝したい。

市民参加型イベントも多彩に

今回の博覧会の特長は、環境共生の理念と同時に、市民参加である。賛成反対をめぐる大論議の中、市民参加による検討会が立ち上がり、それが大きな役割を果たした。

また博覧会の期間中は、多くの市民参加型イベントが繰り広げられ、さまざまなもてなしボランティアも随所で活躍する。これも時代の流れである。

思えば、大阪万博は「経済の時代」の万博。今回の愛・地球博は、「環境の時代」の博覧会なのであろうか。大阪万博を皇太子殿下として迎えられた陛下が今上天皇としてお言葉を述べられ、現皇太子殿下が博覧会開幕のスタートボタンを押される。まさに一世代を経る中で、この間、人々の意識も博覧会の概念も大きく変わり、環境問題への認識も大きく進化した。

長久手・瀬戸の両会場においても、会場を訪れる人は、おそらく環境配慮の行き届いた会場建設やパビリオン建築に驚かされることに違いない。また、企業そ